

著者インタビュー

水野敬也



みずの・けいや 1976年、愛知県生まれ。自己啓発ファンタジー『夢をかなえるゾウ』が189万部の大ベストセラーに。最新刊『四つ話のクローバー』は「夢・幸せ・人間関係・命」について学べる人生の教科書。

どんな人に読んでもらいたいとか、いわゆる「読者層」はあまり考えていません。というのも『夢をかなえるゾウ』が189万部売れ、すごいことだと思っただけですが、周りには（同書を原作にした）ドラマは見ただが本は読んでないという人ばかり。合コンでこれだけ本が売れたのだからモチベーションはどうも思っただけの子に「読んで？」と聞くと、急に座の空気がどんよりして「テレビドラマに出演した」古田（新太）がよかった、小栗（旬）がよかった」と

他のビジネス書を読んで疑問に思うのが、もし全員が成功したら全体として変わらないということ。一方で成功だ

面白くない本なら出さなきゃいい

面白くない本なら出さなきゃいい。そういうことが3回くらいあつて、これはダメだ。現実を目の当たりにし（読者層を絞るのではなく）もつと誰にでも読んでもらえる本を作りたい、その限界に臨みたい、と思いました。

面白くない本なら出さなきゃいい。という話に流されていく。そういうことが3回くらいあつて、これはダメだ。現実を目の当たりにし（読者層を絞るのではなく）もつと誰にでも読んでもらえる本を作りたい、その限界に臨みたい、と思いました。

けが人生じゃないという言い方も好きではない。成功した人が年を取って急に「幸せとは……」と語り始めるとカチンときます。今回、第1話は成功法則をメタに突きつめて（多くの成功法則を一つに集約して）います。次に、全員成功はありません。成功はありえないことから、成功は大事だが、それだけでは幸せになれないと第2話「ハッピーコロシウム」を書きま

話全部で30本近く書き、4話を厳選しました。大学生から年配者まで50人以上に読んでもらい、面白いかどうか点数をつけてもらって書き直すという作業を続けました。これに2年近くかかっています。本として完璧なものにしてから出したいのです。また、そこまでやりきれないと自信を持って売りきれない。面白くない本なら出さなきゃいい

という意識はあるんです。相田みつをもメッセージは素晴らしいが、世間的には「あ、相田みつを読んでんだ〜」みたいに見られる。書店で自己啓発書の棚の前に立った時点で、自分の弱さの証明になる。自己啓発書は不安な気持ちを癒やすためのものですが、同時に人を見じめにもします。僕はそこを変えたい。

した。第3話のテーマは「相手の立場に立つ」です。あらゆる啓発書で言われているが、やれている人は少ない。多くの人が集まる駅のホームを舞台に目からウロコの展開はできないかと考えました。

この本は見ただ感じ、軽いものに仕上がっています。同じことを伝えるのに読むのに5時間かかる本より2時間で済むほうが優れていると僕は思います。僕たちはお客さんの時間をもらっているわけですから。

自己啓発というと、僕の中でも「気持ち悪いもの」

世界に向けて、すべての希望が書ければいい、その闘いの一環として本を出しています。

水野敬也
四つ話のクローバー

170万部の大ベストセラー

会社や学校では教えてくれない、幸せになるための「4つの秘密」

水野敬也著
『四つ話のクローバー』
(文響社/1500円)

構成・堀和世